

# 私の保育

丸山くみ子

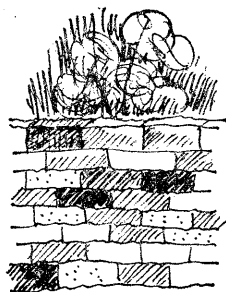
Aは、小柄な男の子で、両親と二歳年上のお兄さんの四人家族で団地にくらしている。三年保育をうけ、私が担任になったのは年中組（四歳児六〇名）の時である。Aは級の中では最も地味な存在であった。

そのAの成長プロセスをとりあげ私の気持と交差させながら「私の保育」についてのべてみたい。

## 様々な素材にふれてみる

年少組（三歳児級三〇名）になったAは、比較的スムーズに園生活になれスタートする。準備や仕度に人一倍時間はかかるが、自分の事は最後まで自分でする事ができた。

一学期、二学期とAは園にある素材、遊具そのものに興味をもち一つずつ征服していた様に思う。まず一つの素材に対して長時間みる、さわる、ならべる、積み上げるなど様々な



方法で確かめてから、それを使って再現化したり創造したりする。

教師や友達には関心を示さず、自分から他者に対して話すことは皆無である。教師の話しかけにも、必要以上の事は話さないし、むしろ迷惑げである。

この時期のAは、しっかり大地に立って自分の関心事をはつきり定めてそれをじっくり見る、又ある時はその目的自体を捜すために立つ、という事に専念していた様に思う。それはあたかもあの短距離ランナーがスタートラインについた時に似たものを思わせる。自分の全神経を集中させてピタリと定めるその姿は、静かではあるが実際に走っている時よりも大きな気迫を感じさせる。つまりAも素材を使って遊び始めると、表情も態度もゆったりとする、が自分の遊びをみつけるまでは静的であるが、遊びそのものより、エネルギーの大きさとA自身の存在を感じたのである。後にこの時のAの姿がいつも私の心にあって、彼がおちこんだ時も彼には自分で自分を教育する力があるからと信じさせるベースとなっている。

### 遊びが固定化する

年少組三学期から年中組五月ぐらゐまでほとんど外で遊ぶことはなくなり保育室ですごす。一人で飛行機や電車、車、ヘリコプターなどの絵をかいたり、乗り物のおもちやで遊ぶ。表情はどちらかといえば沈んだ感じでもくもくと同じ遊びを続けている。

今、思い返してみるにこの時ほどAに対し不安な思いをもったことはない。一人遊びや同じ活動をしているのが不安なのではない、Aの表情の暗い事が気になっていた。何が彼をしてそうさせているのか知りたかった。しかしその時はA自身にもわからなかったのではないか、そして「何か自分はかわりたい」という内からつきあがる様な衝動があったに違いない。その心の動きが激しいだけに外面に出る行動は、自分の一番安心できる単純なしかも繰り返しのきく遊びをしていたのではないかと思う。ただその時はその事が全く私には見えなかったが、Aは大丈夫と信頼してそのままにしておいた

のである。

Aの成長記録をトータルでみる事ができる現在、次にくる課題の大きさ故、五か月間のスタートラインでの静止の時間がAには必要だったんだということがわかる。

僕友達てきたんだ！

年中組になった時、二年保育で入園してきた子どもが半数加わる。その中で小柄な男の子Mは一人っ子で育った。Mは近所の小学生と一緒に遊んでいたせいか、遊んでもらう事にはなれているが自分から遊びをみつける事ができない。そのため入園当初より他の子どもの遊びをみている事が多い。しかし遊びの素地はできているので気持の上ではその遊びに参加していた。

Aは、そのMに興味をもつようになる。最初Aは絵をかきながらMを観察する。すわる時にはMの隣りにくる。帰りの仕度の世話を焼く。これらの言動が出て来たのは五月中頃からであるが、六月に入るとAは完全にMを独占して彼をつれ

まわす。「ほくM君と友達になったんだ」といきこんで生活する。

Mも、六月中旬ぐらいいまで環境になれていないこともあってAの行動がうれしかった。しかしそのうちMは自分のあまりの不自由さから、Aの態度に不満をもち始め少しずつAから離れようとする行動が出て来た。

夏休みがすぎ、二学期に入ってからAとMの関係は少しずつ変る。そしていよいよ九月三十日のMの独立宣言にいたるのである。この日の朝Mは登園するとロッカーで着替えているAにむかって「今日はAちゃんとは遊ばないからね」という。そしてさっさと一人で外へ出てブランコ乗りを始めたのである。

この日のMとAを忘れる事ができない。Mはようやく自分の気持を自己主張できたうれしさを、ブランコに乗るという行動に託して空に向かって自分の体と心をとばしている。Aはわけのわからぬ自分自身へのくやしさと、せっかくできた友達に離れていった悲しさに廊下で茫然として立ってブランコの方をみていたのである。

Aは年少組の終り頃から他者の存在に気付き始めた。友達

がほしくなった。

そこで四月新入園児が入ってきた時、自分と類似した行動をもっているMに注目した。幼稚園という場に一年先輩である有利さをいかして安心してMと友達になった。

しかしAは始めての他者Mに対してうまくつきあう事ができない。どうしても遊び始めると、自分の世界や創造する力を充分もっているAは、自分のイメージ通り遊びを展開させてしまう。だからMは、自分の意見を言う事も許されずにそれを遂行するために使われてしまう。

そして夏休み終つての九月、ここで大きな状況変化がおきている。つまり三年保育の子どもも二年保育の子どもも夏休みという時をへて二期をむかえた時、様々な意味で同じスタートに立ったという事である。だからMには、四月五月にあったハンディはもうない。Mの独立はおこるべくしておこつたのである。

僕どうしていいかわかんない

それからのAは、よりいっそう友達と遊びたいという欲求が強くなる。Aはある決まった四、五名の男児グループの後にくつつく。じつくり型ではあるが反面要領の悪いAは、そのグループの足手まといになつてしまう。だから警察ごっこをすればAだけ「わるもの」の役にされ、すぐ牢屋に入れられてしまふし、積木遊びをすれば作ったものがこわされない様に見張り役ばかり。あげくのはては格好のからかい的になりAにとっては真剣であるばかりに最終的には泣かされてしまう。それでも泣きながらグループのあとについていく。そして十月中旬のホールでの事件がおこるのである。

その日ホールへいくと、そのまん中でAはあらん限りの声をあげて泣いている。それもいつもの泣き方とは違う。「どうした?」とかがんで手を握るとAは泣きながら握り返す。しばらくそうしているうちに泣き声が弱くなって来たので再び「どうしたの?」と聞く。「先生、僕どうしていいかわかんない。だってDちゃんはFちゃんの事やつつけろというしFちゃんの所へいったらDちゃんの事やつつけろっていうんだ。僕どっちをやつつけたらいいのかわかんない」という。とっさにその時私は人間の先輩として様々な答、助言が走馬灯の様に走つた。しかし話そうとするとどれもこれもがこの

場のAの気持にあわず結局ただ「それは本当に困ったねー」と言っただけである。

Aが入園して一年と半年間、Aに対する教師の役割は「場」と「素材」と「時間」を準備提供することであり、遊びの内容に応じ、助言刺激することであった。それで充分Aは自分で自分を教育し成長していったのである。

しかしその時は違っていた。「他者」という存在を知ってから、なんとか関係をもちたいとAのあっただけの経験と知恵と体を使って闘って来た。しかしもうわからない。ここで始めて教師の精神的存在が彼に必要となったのである。ここでは「友達とは仲良くしましうね、けんかしてはいけませんよ」といったたぐいの道徳的訓話が必要だったのか、違うと思う。おこった事柄をつきぬけてその奥にあるAの心を他者が理解することによって、逆にAが本当の他者の存在とは何かを感じとることができないか。しかし人間としての成熟度の低い私にはそれを伝える言葉はなく、泣いている現場に共に居るといふそれしかできなかったのである。

つなげてもいい？

Aはまた一人遊びに戻った。私はこの頃意図してAと並んで砂場で一緒に遊んだ。Aが遊びに夢中になって自分のイメージを私におしつけてくると「先生には違う考えがあるんだけど」と負けずに主張する。一週間ほど砂場で遊んでいるうちに、Aにとって一つの画期的なことがおきた。

その日もAは朝から一人で砂場で砂を掘って遊んでいた。その横で以前の男児グループとは違う男の子たち五、六人が砂を掘っていた。私はその状況を頭に入れて三十分間その場を離れた。再び戻って来た時Aの表情にふと違うものを感じ少し離れてみていた。グループの子どもたちの穴は大きくその中には面々と水があふれ海になっていた。彼らはお互いのいろいろの話をしながら、水をくんだり、土手をかためたり、更に砂を掘ってそれで海の横に山をつくったりで各自が自由な安定した雰囲気の中で活動を展開していた。

そこへ全く突然隣りで小さな穴を掘っていたAが近寄り「僕の穴とこっちとつなげてもいい？」と、グループに向か

っていったのである。最初は無視されたがAが再び聞くとグループの中で気持の優しいKがまぶし気にAをみながら「いよ」と答えたのである。Aはすぐさま真剣になってグループと自分の掘った穴との間を掘って道をつけ始めた。砂場というよりはどろ場に近い状況からすれば道をつけるという事はかなり地味な大変な作業であった。Aの粘り強さをしてようやくつながったが、単にそれだけの事であって誰もその事に関心を示す者はいなかった。

ふとその時できあがった道を見てKが「Aちゃん」そっちの方から水を流してみろという。Aが水を流すとそれは地面に吸われてしまうが、二、三回するうちにたどたどしく道の上を水は流れ大きい海までたどりついた。その時、「おやこれはおもしろい」と思ったのであろう全員の子どもが手を休めてAをみたのである。リーダー格のWが「Aちゃんもう一回水流して」という。Aが水を流すと川となって勢いよくほとぼしる様に大きい海に流れこんだのである。それからAは、このグループのメンバーから対等にうけいられ、一員として砂場遊びを経験したのである。

Aは自分で掘った穴をたずさえて友達の前立つ、そして

「つなげてもいい？」と聞く。これは見事だ。場の状況をつなげる事によって自分自身も仲間とつながりたかったのである。そしてAはKの力を借りつつ地味な努力を重ねてそして他者に認められるにまで至ったのである。

Mとの時の様に自分の主張ばかり通しても駄目なんだ。まして、グループの後にくっついて相手の言いなりになるばかりでもないけないんだ。自分の考えもあり相手の考えもありそこでぶつかって認めあって始めて対等な関係ができるんだと、すさまじいまでの体験を通してAは学び体得していったのである。

### チャレンジする

それからAはだんだんに一人遊びの時もあれば、偶発的な事から友達と一緒に遊ぶ事もあるなど行動に無理がなく自然にふるまうようになる。

三学期に入ってAは一見不思議な行動をとる。寒い日の朝、ジャングルジムの下の段を登ったりおいたりしている。

そして少しずつ高さを増していく。それでも二週間後の朝までには、数人の男の子とジャングルジムのてっぺんで自動車ごっこをするまでになる。

二月上旬の寒い日、Aは一人庭で小屋の前にたつ、この小屋は短大生と幼稚園主事がつくったもので高さ一四〇cm広さ一坪半ほどの切妻づくりのものである。子どもは、小屋の中心でお家ごっこもするが、この切妻屋根に登る事も大好きである。さてAは意を決して小屋の後にある年長児のつくったはしごに登る。慎重に一段一段登り屋根にたどりつく。はいつくばってようやく屋根の稜線に腰をおろしたAは不安そのものの顔でしばらくそこに居る。そして再び地面に戻った時、初めてAは不敵な笑みをうかべたのである。

子どもの世界には私達大人の知らないランク付や掟がある。級で一番強いのはだれで、二番目はだれでと十番目ぐらいは決まっている。お弁当食べるのがはやいのは△ちゃん、□ちゃんは泣き虫でとその評価は概して正確である。級の男児たちの間で小屋の屋根に登れて飛びおりする事ができるか否かの極めて敵しいチェックがある事を知ったのはAの行動の後である。私の記憶では秋ぐらいいまでは男児のほとんどは

屋根の上に登ったりおりたりしていた。

だとしたらAの胸にはそれがどんなに重たかった事だろう、運動神経の鈍い臆病とも思える程慎重であるAにとってそれはエベレストほどもあったか。それでも彼は自分の実力よりは数段上の目標に向かって挑戦する。そして全く自分の力でのりこえた時、彼は自分自身に勝ったのである。そしてあの不敵な笑いの中に、そこにはとどまらないすでに又次の目標に向かって歩み出すところのAを感じたのである。

## 最後に

記録を通して、教師の破れ多き事、鈍き事にもめげず、子どもは着実に成長している事が改めて確認できる。私にとって保育とは、教師が子どもに教えられる事、そして子ども自ら教育しようとする力の助け手になる事ができればと思う。

(東洋英和女学院短期大学附属かえで幼稚園)